

2020/12/3

(うと Q 世話し 「壁に耳あり障子に目あり」であるが故に )

「壁に耳あり障子に目あり」

我が国国民の心の奥底にあるのは、この諺なのではないか？

不図そう感じました。

上記の諺の一部である「壁」と「障子」を「隣人の耳目（盗み見、チラ見や聞き耳、盗み聞き）」に置き換えると実感できるのではないのでしょうか。

何処かの国の治安組織よりも遥かに数が多く、遥かに怖い。

それで行住坐臥、手も足も出ず、ひっそりと息を凝らながら暮らしている。

数日前のネットの記事で

「東アジアの小国（面積が小さい）の国民が感じている幸福度に比べて、我が国国民が感じている「幸福度」はかなり低くなっている」

というのを目にしましたが、我が国のインフラや生活レベルの加得点が遥かにその国を上回っているのに、その加点分を物の見事に帳消しにし、あたかも「不幸のどん底」に居るかの如き地位にまで押し下げてしまっている主な原因は、この暗黙の「相互監視社会（相互呪縛、相互自縄自縛。言葉を変えれば横並び意識、或いは、ちょっとでも違おうと爪はじきにあってしまう村八分社会）」のような上述の諺に代表される何物かではないのかな？

と不図思った次第です。

創造してもみてください、隣のひとが仲間でもなく、正当な対抗者でもなく、実はスパイか二重スパイ、いやいやもっと多重スパイ、(指数係数)  $n$  乗スパイなのだ…としか思えない心理状態が常に続いている状況を。

それにしても我が国国民はどうしてそう迄、ひとさま、即ち隣の人の事が気になるのでしょうか？

「壁に耳あり障子に目あり」

の他

「隣の芝生は青い」

とかありますし。

なので、弊社は企業理念として、この隣の人に特に光を当て

「国際間、世代間、(具体的、且つ実際に) あなたの隣にいる人との交流事業」

を行い始めたわけでございます。

ただ、既に3年近くたつのに、未だその端緒にすらつけていない事に自憤（自らにいきどおること）を感じて居りますが。